

幻想入りした仮面ライダー

しじみっくす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近はずっと平和で穏やかな日々を送っていた

幻想郷の住人達。

ある日突然、壊されることとなる。

見たことのない怪物の出現。

幻想郷の住人の攻撃が通用しない怪物たちに

対抗できるのは主人公だけ?!

目次

平和、驚き、急展開?!	1
少女、妖怪、襲撃	5
蜂、無敵、絶体絶命	9
スペルカード、ノリ、変身	19

平和、驚き、急展開?!

「はあー… 今日も暇ねえ」

とある神社の縁側。

そこにはお茶を啜りながら、空を流れる雲を暇そうに眺める少女がいた。

紅白の不思議な巫女服を着ており

何故か脇を露出していて、頭には赤いリボンを結んでいる。

少女は博麗 霊夢。

この幻想郷と外の世界を隔てる博麗大結界を

管理する博麗神社の巫女であり、幻想郷で起こる

大きな事件”異変”に対応する異変解決者の1人。

最近はその異変も起こらず、平和な毎日を

暇そうに送っていた。

「こんなに暇なら、異変の1つや2つ起こってくれても

… いや、やっぱりめんどくさいわ」

そんなことをぼやきながら、霊夢はお茶を1口啜った。

「さてと… そろそろ神社の掃除でも始めようかしら」

毎日の日課となっている神社の掃除をする為、

お茶を縁側に置き、掃除用具入れから竹箒を持ってきて

境内へ向かった――

一方その頃

博麗神社に行くためには、とてつもなく長い階段を登らなければならない。

その階段を登りきればもう目の前には博麗神社が建っている。

それは、博麗神社に繋がる階段の前で起こった。

バリバリバリツ!!

ドサツ

「あいたっ!」

突然、何も無い空間が音をたてながら裂け、

1人の男が落ちてきた。

紺のV字ネックTシャツに黒のパーカー

紺のジャージを着た完全に部屋着の男。

髪は短髪で寝癖のまま整えられておらず、

しかしその寝癖が良い感じに決まっている。

「いってえ… ってえ?!なにになに?!ここどこ?!」

尻もちをついたその男はケツをさすりながら

ノロノロと立ち上がり、かと思ったら突然

テンパリながら周りを見回した。

名前は雨宮 涼。

別の場所で帰宅の途中に突然、目の前に先ほどの裂け目が出現し、止まりきれずに侵入。

気付けばこの状況。

「つてか俺のチャリ!… あった」

涼は交通手段に使っていた自転車を自分が
落とされた場所のすぐ近くで見つけ起こして
ストツパーをかけた。

「それにしても、ここは一体…」

自転車を見つけ、ある程度落ち着いた涼は
まずは状況を整理しようと考え始める。
どうやら一本道のように右を見れば何もなく、
左を見れば謎の竹林。
正面はどこかに続くであろう道があり、
後ろにはクソみたいに長い階段。

「これは… 都会にあるクソ長いエレベーター以上に
長いんじゃない。」

「おそらく、涼史上最長の階段を目の前に
開いた口が塞がらない。」

ドオオオオオン!!!

そんなことを考えているとその階段の頂上から
なにかの爆発音が聞こえてきた。
しかも一番最初のでかいヤツを筆頭に
何回も聞こえてくる。

「うわっ！… ビックリしたあ
って、そんなこと言ってる場合じゃ…！」

ただ事ではないと察した涼は

急いでその長い階段を登り始めた――

少女、妖怪、襲撃

時は少し戻って博麗神社。

境内の掃除を始めた霊夢は
黙々と箒を動かす。

特に何事もなく掃いていた霊夢が
突然、動いていた手を止めて空を見上げた。

「あれ？今結界が…」

博麗大結界を管理している巫女が故に
結界のちよつとした変化などに気づける霊夢は
結界の何かを感じ取った。

そういえば最近結界になにか異変を感じる事が
多くなった気がする。

あとで確認しようかしら？

そう思ったのと同時に霊夢の目の前に突然
別の空間に繋がってそうな穴が現れる。

「はぁーい、こんちにわ、霊夢」

そしてその穴から金髪の日傘を指した
少女(?)が顔を出した。

その少女(?)のご機嫌はよろしいようで
ニコニコしながら霊夢に挨拶する。

「わぁっ！って紫…びっくりするじゃない！」

突然目の前に現れた金髪の少女(?) 驚いた霊夢は

怒気のこもった声でその少女（？）の名前を呼んだ。
彼女の名前は八雲 紫。
博麗大結界の監視をし、また、外の世界と
幻想郷の間に幻と実体の境界を作っている妖怪。
しかし、当の本人は寝ている事がほとんどで、
結界の監視は紫の式神がやっているようだ。
そんな彼女がわざわざ霊夢の前に現れた理由。
それは――

「霊夢、誰かが外の世界から
幻想郷に迷い込んだわ♪」

そう、何者かの幻想郷への侵入。
もとい、幻想入りを果たした何かがいることを
楽しそうに報告した。
その報告を聞いた霊夢は先ほどの結界の異変に
合点がいった。

「さっきの結界の異変はそれだったのね…
それにしても楽しそうね？」
あんたもしかしてまた…
と何か言いかけた霊夢だったが、
紫の言葉に遮られる。

「今回は私は何もしてないわよ？
結界の異変に気づいてるのに何もしてない
あなたが原因なんじゃない？」

「くっ、言ってくれんじゃない…
あとで確認しようと思ってたのよ…！」

なんとも的を得た発言に返す言葉がない霊夢。
たしかに最近はずっと平和すぎたのか、結界の管理を
怠っている。

そのせいでこの間も誰かが幻想入りしたみたいなんだが
結局誰なのか見つけられず、放置。
そして、今に至るのだ。

「それはそうと… 今回の人
この階段の下にいるみたいよ？」

確認しに行ったらね？

「尻餅ついてて面白かったの♪

と続けた紫。

「いや、そこはここまで連れてきなさいよ…」

呆れたように手を腰に当てながら紫をジト目で
見る霊夢。

そして紫は…

「えーだって放置した方が…

面白そうじゃない♪」

この有様である。

それを聞いた霊夢は

流石に肩を落としてため息を吐いた。

「はあ… まあいいわ、とりあえず待ってれば来るでしょ。
なんとなくそんな気がするわ」

そういつて掃き掃除の続きを始める霊夢。
霊夢の勘は非常に当たることで有名だ。
なんでも、博麗の巫女の特性らしい。

「あなたがそういうなら来るわね。

待ちましよう…ん？」

その時、紫は何らかの気配を感じ取った。

「なにか近づいてきてるわね…

まあ、大丈夫でしょう」

妖怪なのかなんなのか判断出来ないが、
力的には大きくなり、問題なく対処できる相手だと
紫は思い、特に何もせずにいることにした。
しかしそれが、仇となってしまう。

「なにか近くに来てるみたいだけど…

何者よ、こいつ」

霊夢も気づいていたようで紫に問いかける。

「私にもわからないけど、きっとただの雑魚よ。

問題ない——」

ドオオオオオン!!!

そう言いかけた瞬間、突然何者かによって
攻撃が繰り出された——

蜂、無敵、絶体絶命

ドオオオオオン!!!

何者かの爆発によって砂埃が立ち込め
霊夢たちを覆う。

かと思うとすぐに砂埃から斜め上に一本の線が伸び
その中から霊夢が出てくる。

「つと、ゲホッゲホッ！なんなのよ急に!!」

着地し、砂埃によって噎せてしまっている

霊夢は突然の出来事に焦っているのか
声を荒らげている。

そんな霊夢の後ろからスキマが開き
紫が顔を出す。

「びっくりしたわ、でも一体誰がこんな事…」

2人とも目立った外傷はなく、問題なく
動けるようなのだが、肝心のその爆発が
なんなのか、分からずにいた。

実際にその場になにか爆発するようなものはなく
本当に突然爆発が起こったのだ。

普通の人間であれば、今の爆発で
やられていたかもしれない。

だが、霊夢と紫であれば話は変わってくる。

2人とも、いくつもの戦いを乗り越えてきた
強者同然の人物だ。

簡単にやられたりはしない。

砂煙が少しずつ晴れていき、さつきまで

自分たちが立っていた場所が見えてくる。
しかし、さつきまでとは違うものも一緒に
姿を現していた。

「…っ！この感じ…」

「ええ、どうやらこの爆発の犯人は
やつみたいね…」

先ほど、紫と霊夢が感じ取った
妖怪のような気配、その正体がまさに
目の前にいるなにかだった。
時間が経つにつれて、そこにいるなにかの
姿がはつきりと見えるようになる。
山吹色の体に縞模様のどこか蜂に似たような
姿をしている。
人形をしているが間違いなく、人ではない。
そして、右手にはレイピアのようなものを
持っている。
幻想郷は人も、妖怪も、幽霊や神までもが
共存できる場所ではあるが、目の前にいるような
やつは見たことがない。

「このあたりじゃあまり見ないやつね…
あんた、一体何者よ！」

やはり、霊夢も見たことがないようで、
その怪物に問いかける。

「あれ、私としたことが、仕留め損ねてしまいましたか…これは残念」

その怪物は未だに立っている霊夢たちを見て
残念そうに肩をすくめる。

今の一撃で終わらせるつもりだったようだ。

「私はイマジン、本来なら過去の人間と契約をかわさなければ実態を得られないのですが、この世界ではどうやらその必要が無いようです」

霊夢と紫に丁寧にお辞儀をし、自己紹介をするイマジンと名乗る怪物。

人間の言葉を喋ることができ、意思の疎通は可能のようだ。

その外見に似合わない口調に多少

驚きつつも、すぐに睨みをきかせる。

「イマジン？聞いたことない種族だけど、私たちに攻撃してきたってことはどういう事か… おわかりかしら？」

紫にも、このイマジンという存在に関する

情報はないようだ。

しかし、相手が何者かわからずとも

この2人は幻想郷では実力のある方だ。

無傷とはいかなくとも勝敗は手に取るようにわかる。

負けるわけが無い。

紫も霊夢も、そう思っていた。

「あなた方のことは、主から多少伺っておりますが、今の私がこの世界の住人に負けることはありませんよ…」

しかし、現実はそうではなかった――

「そういうことは、私たちに勝つてからいいなさい！」

先に手を出したのは霊夢だった。

袖から何枚かお札を取り出し、

イマジンのいる方へ投げる。

そのお札はただのお札ではなく、

霊夢の霊力の込められたお札だ。

そのお札がイマジンに当たったその時、

爆発が起こった。

その時に起こる煙のせいで

イマジンの姿が隠れる。

「まだまだ!!」

霊夢は攻撃の手を緩めることなく

続けざまにお札を放つ。

そしてそれも見事に命中したのか

爆発が起こった。

今の攻撃に全力を出していたのか

霊夢は少し肩を使って息をしていた。

イマジンの反応は特になく、

少しの間静寂が場を制した。

「霊夢…少しやりすぎだよ」

紫は額に手を当て、やれやれと言った感じで

霊夢に話しかける。

イマジンに当たらなかつた流れ弾は

地面にあたり、そこをえぐっていた。

今の攻撃にどれだけ力を込めていたのか…。

紫はそう思っていたのだろう。

「はあ、はあ、突然現れてあんな余裕かまされたら、そりや腹立ちもするわよ、これくらい当然じゃない！」

怒りが収まらないのか、紫にも強く当たる霊夢。

しかし、2人ともこれでイマジンはやったと

思ってた油断していた。

それが命取りとなる。

ピュン

霊夢の真下に何かが飛んできた。

「ん…？今なにか聞こえたような…」

霊夢は音には気づいたものの

どこに何が飛んできたのか

気づいてはいなかった。

「…！霊夢！早くそこを離れて！」

「え…？」

紫はそれにいち早く気づき

霊夢に伝えたが、その時にはもう遅かった。

ドオオオオオン!!!

霊夢の真下に発射された針が

爆発し、霊夢を包み込んだ。

間一髪、霊夢は飛んで直撃を免れたが、爆風に巻き込まれ、地面に叩きつけられる。

「かはっ！」

不意に起こったことに受身が取れなかった霊夢はすぐに立ち上がることができなかった。

そこに追い討ちをかけるように

2発目が繰り出される。

しかし今度は、紫が爆発する前に霊夢をスキマに引きずり込み、イマジンの後ろへ移動した。

「霊夢、大丈夫!?!」

霊夢を抱え、安否を確かめる紫。

地面に強く叩きつけられたため、

かなりの体力を持っていかれたが、

動かなくなるまでには至らなかった。

「大丈夫よ... それにしても、今の爆発...」

なんとか自分の足で立ち上がり、

爆発した方に目をやると、そこには

攻撃を食らってもなお

無傷で立ち続けるイマジンの姿があった。

「あなたもなかなかしぶといですね... 私の攻撃を受けてもなお、立てるなんて...」

あなたは本当に人間ですか?と続けるイマジン。

腰に手を当て、困ったような素振りを見せている。

「あんたこそ、私の弾幕を受けても無傷ってどういう体してんのよ…。」

無傷のイマジンをみて驚く霊夢。

地面がえぐれるほど霊力を込めたのに

それでも変わらないイマジンに

焦りを感じ始める。

「だから言ったではないですか？あなた方の攻撃はきかないと！」

そう言い切るのと同時に

額にある針を霊夢たちの方へ飛ばす。

「霊夢！あれが爆発の正体よ！避けて！」

紫はそう言ってスキマの中に隠れる。

「あんたはスキマがあっといういわね！」

そう言いながらも空に飛んで針をかわす。

そして、さっきまで霊夢たちがいた場所が

また爆発した。

霊夢は賽銭箱の前に着地し、

それと同時に紫が現れる。

「霊夢、私はやつの後ろから仕掛けるわ。気を引いておいて頂戴。」

紫はスキマを利用してイマジンの背後に回り、

攻撃を仕掛けるつもりようだ。

囷を務めることに対して多少文句がありそうな

霊夢だが、今はそんなこと言ってる場合ではない。
嫌そうな顔をしながらも同意した。

「…今はそれしかなさそうね。わかったわー！」

霊夢はそう言つてすぐにお札を構えた。

イマジンは今にも針を飛ばしてきそうな
体制でこちらを見ている。

「頼むわね…！」

そういつて紫はスキマの中に入り、隙を伺う。

「何をヒソヒソやっているのか知りませんが…このままではやられ
てしまいますよ？」

余裕をかますイマジンは攻撃をせずに霊夢に

挑発をするような口調で話しかけてきた。

現状では2対1にも関わらず、イマジンが有利。

きつとスペルカードを使ったところで

無意味なんだろうし、今は紫の作戦を優先しないと

勝機はない。

そう思った霊夢は下手に動かずに言葉を返す。

「うるっさいわね…！そっちこそ、早く攻撃してきたらどうなの？」

攻撃している間はきつと隙ができる。

紫が攻撃を仕掛けるならその隙を狙うはず。

そのために霊夢は攻撃させるように

仕向けなければならない。

そのために、霊夢も挑発をして

攻撃をするように仕向ける。

「ふふ、ずいぶんと強気ですね…。それでは、お望み通りに！」

直後、放たれた針は真つ直ぐ霊夢に向かう。

イマジンは今度こそはと確信したかもしれない。

だが、簡単にやられる霊夢ではなかった。

「はっ！」

お札を針に向けて放ち、相殺する。

イマジンは予想外だったのか、なに？と眩いていた。

「紫！今よ！」

霊夢がそう叫んだ途端、イマジンの後ろに

スキマが現れた。

「しまった！」

振り向くイマジんに襲いかかる紫。

誰もがこれで終わりだと思った。

しかし、そうはいかなかった。

「…なんていうと思いましたか？」

イマジン右手に持ったレイピアで

紫に反撃した。

「ぎゃっ！」

「紫！」

紫はスキマから投げ出され、階段のすぐ近くに倒れ込んだ。その時にスペルカードが散らばる。

「後ろから来ることくらい、安易に想像できますよ」

そうやって紫にレイピアの先を向ける。

動けばやられる、この状況に成すべがない紫はすべての行動が封じられてしまった。

「くっ…： 一体何が目的なのよ！」

紫は動けないながらもイマジンに

睨みながら怒気のこもった声で放った。

そして、イマジンから返ってきた言葉は予想もできないことだった。

「目的？そんなこと、知りません！」

イマジンはレイピアを振り上げ、

紫を切り裂こうとする。

霊夢は紫の名前を叫び走り出し

紫は相手を見据え、一番危険な状況にも関わらず目を離さない。

その時だった。

「や、やめろ!!」

階段から一人の少年が叫んでいた。

スperlカード、ノリ、変身

少し時は戻って博麗神社に続く階段。
めちやくちやに長い階段を8割は登りきり、
やつと頂上が目と鼻の先となってきた頃、
まだ爆発音が止まないでいる頂上では何が
起こっているのか、やはり男である涼は
不安もありながらもちよつとした期待を
胸に進んでいた。

「やっぱりなんか変な怪物とかと正義のヒーロー的な
なにかが戦ってんのかな…！」

実に不謹慎な男である。

涼は小さい頃からそういった

ヒーローに憧れてはいた。

もちろん、そんなのは空想の産物であるのは
理解しており、あくまでも憧れてあつて

それを目指そうとかはしてはいない。

しかし、突然のこの状況に多少は
ワクワクしているようだ。

そんなこんなであと数段まで登りつめると

突然、空から謎のカードが数枚降ってきた。

「うお、なにこれ…：白紙？」

したに落ちたカードを拾ってみると

何も書かれていないことが

確認できた。

そして、またロクでもないことを考え始める。

「これはもしかして、自分の考えたものが
実現するカードなのでは…！やってみよう」

そして考えたのはあるヒーローの姿。

涼が小さい頃、よく見ていた仮面ライダー電王
というヒーローの姿だった。

その頃の涼は、というよりも今もなお、

仮面ライダーが好きで、よく真似をできるくらい
熱中してたので安易に想像出来た。

「やっぱり電王かっこいいなあ…」

傍から見たらただの変態だが、そんなのは気にせず
続けている涼。

すると突然、カードが光を放ち始める。

「…うえ?! な、なにこれ!!」

眩しさに目を瞑る涼。

何が起こっているのか

わからず、光が収まるのをただ待つのみだった。

しばらくして、光がやみ、

カードを確認すると

『装着：デンオウベルト&ライダーパス』

と書かれたカードに変化していた。

もちろん、まさかほんとにそうなるとは思ってなかった

涼は一瞬動けなくなるが、すぐに正気に戻る。

「まじかよ。何なんだこれは…」

カードをマジマジと確認していると

頂上からなにやら話し声が聞こえてくる。

「くっ…： 一体何が目的なのよ!!」

女性の声だ。

声の調子からしてかなり追い詰められてそう。

これは急がないと。

そう思った涼は残りの階段を一気に上り詰めた。

「目的？そんなこと、知りません!!」

頂上について直後、その言葉が聞こえると同時に切り裂かれようとしている女性が見えた。

何よりも驚いたのが…： 人ではない何かがそこにいる。

しかし、そんなこと気にしてる場合ではないと思っただ涼はとりあえず叫んだ。

「や、やめろ!!」

時が止まったような感覚。

すべての視線がこちらに注がれていた。

突然現れた涼にそこにいた全員が

驚きを隠せずにいた。

「…： ！隙あり！」

こんなことしてる場合ではないと

紫はイマジンに弾幕を放ち、

その場を離れ、霊夢の元に移動する。

「くっ、よくもやってくれましたね…： ！」

悔しそうに舌打ちをして
霊夢たちを見たあと、涼を睨んだ。

「あと少しでやれそうだったのに…
まずはあなたから片付けてあげましょう！」

そういつてイマジンは目標を涼に変更し
レイピアを構えて涼に向かってくる。
流石に腹が立ったのか、まずは邪魔者を排除しようと
行動を起こしたのか。

イマジンは涼に飛びかかった。

「え!?!俺!?!うわっ!」

イマジンのレイピアを間一髪でかわし、
地面に転がる。

なんとか体制を立て直してイマジンに向き直った。

「ちよこまかと… それなら!」

イマジンは涼にイラつきながらも
涼に接近し、レイピアでつく。
しかし、それも涼はサラッとかわしてしまった。

「あれ、なんか相手の動きが見える」

気のせいかな… と、冷静に考えていると
イマジンからとめどない攻撃の嵐が
襲いかかる。

「ちよつとーまじでーやめてー怖いから！」

そんなことを言いながら

なんだかんだでレイピアをかわしていく。

イマジンもなぜこんなにかわされるのか

疑問に思いつつも攻撃の手を緩めることは無い。

「紫、もしかしてあの人、さつき幻想入りした…。」

霊夢は今の現状から

幻想入りした人が今まさに

目の前で戦っている人なのでは

ないかと思った。

「おそらく…間違いないわ。」

でも、幻想入りしたばかりの人間が

ここまで攻撃をかわすなんて…。」

今もなお、攻撃をかわし続ける涼をみて、

とてもさつき幻想入りした人間とは

思えないと紫も霊夢も思っていた。

「かわしてばかりではそのうちやられますよ！」

かわされ続けるイマジンは

挑発をするように言葉を発する。

「そんな事言われてもーかわすのでー精一杯！」

文字通り、今の涼では攻撃をかわすので精一杯。

むしろなんでかわせているのか、
それすら疑問なのだ。
それでも、なんとか隙を見つけ、反撃を試みた。

「そこだあー!」

やっと一撃!

そう思ったのだが…

何故か、上手く腕に力が入らなかった。

「…その程度ですか…?」

「え?ぐあつ!」

まったくダメージのないようで、
逆に涼が腹に拳をくらい、
そのまま後ろに転がる。

「かはっ!はあ!はあ!」

今までに感じたことのない痛みに
一瞬うまく呼吸が出来なくなる。
それでもなんとか立ち上がり、
向き直ることはできたが、
既に息が上がり、肩で息をしている。
そして何よりも、さっきの攻撃から
恐怖心が何倍にも膨れ上がってしまった。
もうあんな痛い思いはしたくない。
そんな感情が涼の頭の中を支配する。
体中が震え、攻撃をするための
接近すらできず、その場から動けない。

「くっそ…！こんな大事な時にビビりやがって…！」

なんとか紛らわせようと声を出すが、
それも意味をなさず、やはり動けない。

「あれ、もしかして震えているのですか？

それはそれは…滑稽ですね！」

震えている涼を見たイマジンは

それを理解した上であえて接近してくる。

1歩ずつ、ゆっくりと。

「——っ!!」

声にならない何かと、恐怖心で
後ずさる。

なにか、なにか手はないのか…！

必死になって考えていると

あることを思い出した。

自分のポケットからおもむろに取り出したのは

先ほどの拾ったカード。

『装着：ゲンオウベルト&ライダーパス』

使い方はわからないが…やるしかない。

「…！あれってまさか…！」

涼の行動にいち早く気づいたのは
紫だった。

あの時、落としたスペルカードの1枚を

涼が拾っていた。

そして今まさにそれを使おうとしている。

「誰だかわからないけど…頼むわよ…！」

もう涼に託すしかない紫と霊夢は
神頼みに近い状態ではあるが
そうするしかなかった。

「…いくぞ、『装着：デンオウベルト&ライダーパス』!!」

涼は高らかにカードを宣言。
すると、カードはまたも光を放つ。

「な!?!なんですかそれは!?!」

驚くイマジンは眩しさのあまり
手で目を覆う。

光がやんだ時、涼の腰にはベルトが
装着され、右手には謎のパスカード。
そして、どこか自信に溢れている。

「そ、それは…まさか!!」

どうやらイマジンはこのベルトに見覚えがあるようで
どこか焦りを見せていた。

涼は構わずに左手でベルトの赤いボタンを押し、
パスカードをベルトの中心にかざした。

「まずいーやめろ——」

「変身」

『ソードフォーム』

イマジンが行動を起こしてからでは遅かった。
涼の体を鎧がおおい、背後から
桃の形をした赤いパーツが流れてくる。
それぞれが鎧として装着され、そして…
仮面ライダー電王、ソードフォームが完成した。

「くっ！やはりか…早く仕留めなくては…！」

イマジンは接近戦に持ち込むつもりなのか
レイピアを構えて走ってくる。
イマジンが本日最高の焦りを見せている最中
腰についているパーツを組み立てる。
途中まで組み立て、そのパーツを接近してくる
イマジンに投げつける。

「ぐはあっ！」

それに直撃するイマジンはその場に倒れ込み
のろのろと立ち上がる。
イマジンに当たった反動で返ってくるパーツに
また新しいパーツをはめ、完成したのは
片手剣のような武器。
途端に先端から赤い剣先のようなものが伸びる。

「こんなに綺麗に決まるとは思わなかった…」

ありがとう、イマジンさん」

そういうと涼はイマジンに走って接近する。
さつきまでの涼とは違って変わって
恐怖心が感じられない。

接近してくる涼に気づいたイマジンは
咄嗟に額の針を飛ばす。

スパン！

しかし、涼の剣によって切り落とされた。

「はっ！」

涼は何も出来ずにいるイマジンに
構わず切りかかる。

それはもう、さっきまでの

あれこれの仕返しをせんとばかりに
ズバズバと切りまくる。

最後、思いつきり力を込めて下から
イマジンを切り上げる。

「とりゃー！」

「ぐは！！」

イマジンは一瞬宙に浮き、
地面へと転がる。

「はあ、はあ、なんだ… なんですかその強さは…！」

突然の変貌に驚きを隠せないイマジンは
地面に這いながらも問いかける。

驚くのも無理はない。

さっきまで恐怖に怯えていた人間が
ただ、変身しただけでこれだけの
強さを発揮しているのだ。

「そんなの、俺が一番聞きたいね」

イマジンの質問に適当に答え、
ライダーパスをベルトの中心に再度かぎす。
『フルチャージ』

電子音と共にベルトから剣に
力が送られる。

涼は腰を下げ、剣を構える。

「くっそ…こんなところでやられるわけには…。」

最後の力を振り絞り、

この場から逃げ出そうとするイマジン。

だが、涼はそれを逃がすつもりはなかった。

「じゃあね、イマジンさん」

剣先が独立し、涼が剣を振り下ろした瞬間、
剣先が逃げ出そうとしているイマジンに
直撃した。

「ガアアッ!!!」

——
ツ!!!

そして、イマジン爆死した。

「…やったの…?」

静寂が支配する空間の中、

目の前で起きたことを確認するかのよう
に紫は呟いた。

「… たはあゝ」

一気に緊張がほぐれたのか
涼は勝手に変身が解かれ、その場に倒れ込んだ。